

明治時代の民衆が日清・日露戦争に賛成した理由についての考察

A discussion of why the people of the Meiji era favored the Sino-Japanese and Russo-Japanese wars.

宮崎県立宮崎東高等学校校定時制課程夜間部 3年A組 奥村茉麻

Abstract: The purpose of the study was to understand the formation of values by studying the reasons why the people of the Meiji Era were in favor of war. As a result, it was found that the reason was due to a change in ideology that Japan "should be independent" from imitation. In the future, I would like to research the Emperor.

Keywords: imitation independence ideology identity change

1, 研究背景

夏目漱石の著作を読んだ時私は、漱石の視点から、芸術や振る舞い、服装に至るまで、西洋の真似をする日本人の姿を見た。そして彼らは、自分の国に対するアイデンティティを喪失していると感じた。漱石は、「模倣と独立」の中で、文部省の展覧会に行った際の感想として、「文展の画家や西洋から帰って来た二人は自分で自分の絵をかかない。」「油絵で西洋の色々な絵を描いている。＜中略＞クラシカルなルーベンスなどに非常によく似た絵も描いている。フランス派であるが、あれを公平に考えてみると、どこに特色があるのだろう。」と、盲目的に西洋を真似し、それが評価される風潮に批判的な感想を述べている。また、「戦後文界の趨勢」では、「今日まで養成されてきた事実」であった、「何事にも西洋を学ばなければならぬ、真似なければならない」という観念から、物理的に西洋との初めての戦いである日露戦争に勝ったことで戦後の影響として、「西洋を標準としないで、日本自身を標準とすることになるから、人間が窮屈でなくなる」として、日本人の意識や文壇が盛り上がっていくだろうと期待感を感じていた。

日本史の教科書で日清・日露戦争に民衆のほとんどが賛成していたと記載しており、日本が経験する初めての対外戦争であったこと、現代とは違う価値観、後の太平洋戦争につながる価値観の形成に関わっているという点で興味を持ち研究した。

2, 研究目的・意義

「民衆が戦争に賛成した理由は開国以来生活様式から文化に至るまで欧米を模倣し続けたことにより、日本人としてのアイデンティティに揺らぎを感じ、それを払拭するため」という仮説をたて研究することにより、当時の社会的背景や民衆の本当の気持ちに迫るという意義がある。

3, 研究方法

調査 1

与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」という詩から「戦争」「紅顔の死」などの戦争賛美とともとれる詩への変化の理由について探る。

調査 2

言論統制について調べる。

法律や新聞の発達と規制の流れ、教育から、当時の言論に対する制限について調べる。

調査 3

日清戦争前に主流になった国家主義思想の「平民主義」や「国民主義」などを調査し、それぞれの違いや、思想の流れを見ていくことによって、民衆が戦争に賛成した理由を掴んでいく。

4, 研究結果・考察

与謝野晶子の作風は、自分の思いや感情を素直に表現するもので、彼女の詩について戦争賛成か反対かといった単純な色分けは出来ないと分かった。(2022, 産経新聞)

「君死にたまふことなかれ」は明確な意思で作られた＜反戦詩＞とは言えない。この詩は評論家の大町桂月から「国家観念をないがしろ」にするものと批判されたが、非戦を主張するわけではなく、家族を心配する人情としての正直な思いとして書いたと主張したからこそ検閲対象を免れた。桂月に反論した「ひらきぶみ」の中には、「平民新聞とやらの人達のご議論など一言ききて身ぶるひ致し候」と社会主義者達と同列に論じられる危険を回避しようという意志も感じられる。(2012, 田口道昭)しかし、1910年の大逆事件で、夫の鉄幹は社会主義者で非戦論者の友人大石誠之助を亡くすることになるが、交友関係から晶子も全く関係がないといえないのではないかと感じた。後年、晶子は戦争に関する歌を発表していく。第一次世界大戦を題材にした「戦争」という詩の一文には、「いまは戦ふ時であ

る 戦嫌ひのわたしさへ 今日此頃は気が昇る」という文がある様に戦争自体に反対しているわけではなかった。(2004, 青空文庫)

また、「晶子の皇室好きは血肉化した体質」になっていたという分析もある。明治天皇を追悼した歌、昭和天皇即位した時の歌などを歌っている。(2012, 田口道昭,)

このような詩を歌う半面、彼女の戦争観は、シベリア出兵に関しての晶子の考えを書いた、「何故の出兵か」の「兵は凶器なり」という支那の古諺にも、戦争を以て「正義人道を亡す暴力なり」とするトルストイの抗議にも私は無条件に同意する」や2014年に発見された日中戦争を憂う詩(2022, 産経)などに見られるように、根本の思いは戦争は残虐なものという認識を持っていたと分かる。矛盾したような晶子の歌の数々に彼女の心をとらえることの難しさを感じた。そこに戦争で複雑になる人間の心を感じた。

明治10年代末から20年代なかばの時期は、日本にとって、憲法発布や国会開設など、近代国家としての制度と機構が確立した時期であった。急速な欧化主義が実施され、若い世代の間に新しい思想潮流として現れたのが、近代日本の見直しだった。(2005, 胆, 紅)

1886年に論壇デビューした徳富蘇峰は「将来之日本」の中で日本の独立を最大の課題として、時代の変化の激しさが、社会や生活だけでなく、人々の内面にも及び、精神的危機を引き起こしていることを憂慮しながらも文明化を普遍史的傾向として受け止めて、「優者の列に加入」として説いた。(1990, 梅津)(2005, 胆, 紅) 昭和7年に晶子は蘇峰の古稀を祝う「寿詩」を書いており、その中で蘇峰への尊敬心を感じることが出来る。

陸羯南は、日本国民の国家観や国民精神を中心とした「国民主義」を唱えた。

政治と文化は関連しあっており、自国特有の文化こそ国民的自負心の根拠であり、それなしには国民の政治的独立は不可能だと主張している。「文化の固有性」という主張は、日本の場合、それは常に皇統の連続性という神話と結びつく。羯南は日本文化の固有性を「建国二千五百年一系不易の帝室」(1891「近時政論孝」①20頁)に求め、それが国民国家の形成にとって不可欠だと考えたのである。(2005, 胆, 紅)

教育普及が急速に進む中、1890年「教育勅語」が発布された。その目的は明治天皇を元首とした国家への国民の忠誠を作り上げ、教育の思想・統制をはかるためであったが、天皇観というものは、日本の独自性を求めた結果生み出されたのかという疑問も湧いてきた。蘇峰、羯南は日清戦争を契機に思想的立場を急角度に転換しており、蘇峰はそれを「平和主義より帝国主義に進化した」と表現し(2001, 米原)、羯南の「日本」も戦争正当化を「文明」に求めた論調になった。(2005, 胆, 紅)

5, 結論及び今後の展望

現代日本の価値観では、「戦争に賛成する」というのは、考えられないことだろう。

しかし、戦時中はそうではなかった。戦争に賛成した理由や、「天皇」という存在など、私には想像しにくい問題だった。主流になった思想の根源は祖国の変化が欧米に浸食されていく事への不安から、「独立」を求めた事にある。模倣をやめて、日本独自の拠り所を求め、それが後の「天皇観」に通じるとするならば、引き続き調査を続けたいと思った。また当時の言論を見ていくと、初めての対外戦争だからといって、「戦争」に対するイメージは、現代の私たちと変わらないことを知った。日清戦争を経験してからの価値観の形成は第二次大戦へと移る中でとても重要なことだと思う。

参考文献・引用文献

夏目漱石(1925)「漱石全集 別冊」, 岩波書店

田口道昭(2012)「与謝野晶子「君死にたまふこと勿れ」論争の周辺」

胆, 紅(2005)「陸羯南と新聞「日本」のアジア論: 日清戦争まで」

梅津順一(1990)「文明化と日本」

米原謙(2001)「初期蘇峰と「平民主義」の挫折」

杉山光信(2013)「明治期から昭和前期までの日本での言論統制-統制の仕組みとじっさいの運用について」

産経新聞, (2022) <https://www.sankei.com/article/20220519-BVUM3MR4HFOBZK7GQFGSNSDKQU/>

2023年12月18日.

日本経済新聞(2014) 日中戦争憂う、与謝野晶子の歌 都内で見つかる - 日本経済新聞 (nikkei.com) 2023年12月18日.

Ohbe(2002) 与謝野晶子 何故の出兵か (aozora.gr.jp) 2023年12月28日.

東京新聞(2022) 文学者は戦争下をどう生きたのか 「過去に学んで」 青学大・小松教授が出版: 東京新聞 TOKYO Web (tokyo-np.co.jp) 2023年1月8日

武田(2004) 与謝野晶子 晶子詩篇全集拾遺 (aozora.gr.jp)

大野(2023) 大石誠之助 外交の後援 (敵愾にあらざる至誠にあり) (aozora.gr.jp)

2023年1月3日.

松井(2013) 詩をよむ日日: 1910年 与謝野寛「誠之助の死」 (livedoor.blog) 2023年1月3日